

〔平成二十八年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二十一年前から続いている『モンゴル仏教史』モンゴル語原本のローマ字転写、翻訳および訳注をおこなっています。この写本は、かつて橋本光實師によって訳された『蒙古喇嘛教史』（原文チベット語）のモンゴル語写本であり、その研究はまだ学界において、さしたる成果は出ていません。これまでの研究会の成果は、「大正大学総合佛教研究所年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二

十六年三月）、第三十七号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛教研究所の助成金によって、『モンゴル佛教史』研究「一」（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究「二」（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究「三」（二〇一一年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究「四」（二〇一五年三月、ノンブル社）の四冊を出版しました。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

使用するテキストはモンゴル語の写本ですが、チベット語版は、ドイツ、日本、中国で三種出版されています。チベット語版からの翻訳としては、ドイツ語訳、日本語訳、モンゴル語訳、漢訳があります。それらを随時参照しつつ読んでいます。

モンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタムを巡るものです。テクニカルタムのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手になるものと思われま

た、人名等の音写語に異なる表記が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

本文献は政治史と仏教史の二部構成となっています。仏教文献としての特徴あるいは問題点については、これから明らかにしていく所ですが、何点か挙げておきたいと思います。まず、チベットの仏教学者（サキヤパンディタ）の格言、インドの龍樹の言葉、仏陀の言葉、ほか経典からの引用がしばしばある事です。サキヤパンディタの格言以外は出典が不明なものも多く、今後精査を行っていく必要があります。次に、仏教語の音写が、チベット語からとサンスクリット語からのものの二通りある点です。教理内容と合わせて検討の必要があります。

本年度の主な研究会の活動

- ・ 毎週火曜日…18時～20時位、研究会
  - ・ 日本モンゴル学会に参加（春季、H28・5・21 東北大学。秋季、H28・11・26大谷大学。）
  - ・ 内モンゴル視察（H28・8・23～8・30）
- 今後の予定

毎週火曜日…17時～18時、初等モンゴル語（希望者がいた場合）

18時～20時位、研究会

場所…大正大学史学閲覧室

## 頼瑜撰『真俗雜記問答鈔』訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑜僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々記したものを集成した著作である。その内容は一二二〇余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑜自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑜の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は古来より三〇巻・二四巻・一一巻など種々の説があり、また写本によって巻順の異同や内容の増減が著しいすでに、『真言宗全書』第三七巻に、高野山南院松永有見師蔵写本を底本とし、二七巻本の体裁をもって活字化されているが、校訂テキストとして未だ不十分とされている。

そこで本研究会は諸写本を聚集し、なかでも巻数の揃った最も古い写本である智積院新文庫蔵本を底本として、【本文】に校訂を加え、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

本年度、訳注研究を行った該当箇所は、新文庫蔵本全二五冊のうち、整理番号・新文庫三一―四―（二五―二三）に相当する一冊の前半部分（一丁表～一〇丁表）である。本書は、外題に「真俗雜記」とあり、内題は無いが、種智院大学本、東大寺本など校勘に用いた諸写本において古層に位置する写本に「第三」とあり、その他の写本と勘案して、本書を「巻第三」と定め、今回報告する箇所を仮に「巻第三ノ一」とした。巻第三ノ一に収録される条目は次の通り。

- ・四九、釈論第四持四重担故名住地事
- ・五〇、因不如故得起而有事
- ・五一、於有愛数四住地事
- ・五二、勝鬘經云世尊四住地力一切上煩惱依種事
- ・五三、仏菩提智斷事

本年度は以上、五つの条目について各担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。今後も次年度以降引き続き訳注研究を進め、「巻三ノ二」を順次発表刊行予定である。

## 近世唱導文芸研究会

研究会代表 由井 恭子

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世唱導関連文献の翻刻、研究を目的としている。当面の目標は、大正大学図書館蔵本『類雑集』を広く学界に紹介することにある。『類雑集』の版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。活字化されていない『類雑集』の翻刻作業は、非常に有意義であるといえる。

『類雑集』は全十巻であるが、平成二十三年度から『大正大学総合佛教研究所年報』に一巻ずつ翻刻を報告してきた。今年度は、総勢十四人の会員を中心に研究会を運営し、巻七の翻刻に着手した。

本年度も引き続き翻刻作業の他に、引用文献の調査も実施した。『類雑集』に引用されている経典などを調査し、原典と校合した。典拠名とともに、本文に異同がある場合は、校異の結果を脚注に示した。

さらに、今年度は、龍谷大学、大谷大学、京都大学、叡山文庫、東洋大学に所蔵されている『類雑集』の諸本調査も実施した。これらの成果は、改めて報告したいと考えている。

以上のように、今年度は本研究会の研究成果である『類

雑集』巻七翻刻と、出典考証を平成二十八年度『綜合佛教研究所年報』に掲載することができた。

『類雑集』は国文学研究者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化されていないことにより、研究が進んでいない状況である。『類雑集』全巻翻刻を達成し、近世における唱導書のあり方について、研究展望が拓けるようにしていきたい。

『唐決』——日本における天台教学受容過程の研究——研究会

研究会代表 寺本 亮晋

本研究会は、第三期目に入り、助走期間二年と二期六年に続いて「円澄疑問 広修決答」と「円澄疑問 維錫決答」の読解作業（訓読・現代語訳・注釈）を進めてきた。この「唐決」の両テキストは、円澄が日本より発する三十の疑問に対して、唐の天台山の広修とその弟子の禅林寺維錫がそれぞれ決答を示しているものである。円澄の発する同じ疑問に対して、両者の異なる答えを比較・検討することによって、疑問から見える当時の日本天台の教学的水準を探り、また唐からの決答の水準も推し量ることができる。そして、初期日本天台がそれらの決答をどのように受容したかを研究し、以降の中古天台を初めとする論議や口決にどのような影響を与えたかを探る基礎となる研究である。ただし、初期日本天台、延いては日本仏教の全体に関わる論点を含む第一級資料として認められているにも関わらず、体系的な研究が不足している。そこで、本研究会の作業の目的は、研究会独自のテキスト作成であり、他の「唐決」テキストの研究のたたき台となる基礎的研究と言えよう。

原則、今年度も月二回のペースで研究会を開催した。すでに前年度までに精査・読解していた五つの問答を、中間報告に向けて再検討を加えた。三十問の中、『法華三昧懺

儀』の証相を明かす段において、上中下の九品のそれぞれに対して、仏菩薩の説く修証はいずれの經典に示されるのかという第二十一問答「法華三昧証相門の九種証相は、何れの經論に出すや」、『摩訶止観』に説かれる五略における感大果の果報が、天台の四土説における実報無障礙土に該当することについて問う第二十二問答「円頓の中道は寂光を期す、何が故に実報を以てその期と為すや」、『摩訶止観』に仏の三徳を説明する際に引かれる、大小乗の六師の典拠とその人について請う第二十三問答「体相章に六師立てる所の不審を出す。其の人拠る所与えるや」、『涅槃經』に説かれる「円伊の三点」について、点の配置や三即一の意義を問う第二十四問答「円伊の三点は何が故に釈と經意と異なるや」、『摩訶止観』に説く乗戒四句の乗急には、戒を備えているのに戒緩と名づけるのか問う第二十五問答「乗急の人も戒無ければ備わらず。何が故に名づけて戒緩と為すや」。以上の五つの問答である。

『法華經』や天台大師智顗の三大部から生じた比叡山からのそれぞれの疑問に対して、唐の回答が射っていないことがしばしば垣間見える。そして、その影響が以降の日本天台の論議や口決に見られることを鑑みると、「唐決」がいかに重要な典籍であったかを再確認するばかりである。また、これらの問答は現在でも結論が出ていない問題を含んでおり、当時の日本の学僧の教学的水準の高さには感嘆せざるを得ない。

今年度も、『大正大学総合佛教研究所年報』第三十九号に、「唐決——「広修決答」と「維鐺決答」の比較研究(四)——」として前述の五つの問答を中間報告させていただいた。また、各研究会会員にはそれぞれ個人研究を促し、発表・論文をまとめるよう日頃よりお願いしている。昨年度より始まったこの第三期で、これらのテキストの読解が一旦完了する予定である。しかしながら、まだ「唐決」には他に五種が残っていることもあり、さらに続けて研究成果を報告できるよう肅々と基礎的研究を続ける次第である。

## 「大学と宗教」研究会

研究会代表 松野 智章

本研究会は、「大学と宗教」を研究テーマとして掲げ、平成二二年度に発足した研究会である。平成二六年四月から第二期が開始し、今年度は最終年度である三年目を迎えた。今年度は、これまでの研究成果を書籍として刊行すべく論文執筆と書籍編纂作業を行い、結果として、左記の内容で書籍を上梓するに至った。

編著者…江島尚俊・三浦周・松野智章

書名…『シリーズ大学と宗教Ⅱ 戦時日本の大学と宗教』

出版社…法蔵館

総頁数…四八四頁

目次…

はじめに（江島尚俊）

第一章 総力戦体制化における教育・学問・宗教（江島尚俊）

第二章 大学における日本主義—日本近代化における歴史哲学試論—（松野智章）

第三章 戦時下の上智大学—カトリック系大学はいかに「日本精神」と取り組んだか—（ケイト・ナカイ）

第四章 近代における日蓮宗の僧侶養成と大学教育（安中尚史）

第五章 戦前期の神道系大学における神職養成（藤本頼生）

第六章 立教大学と聖公会神学院の二重学籍制度（大江満）

第七章 敗戦前キリスト教系大学における教育組織・カリキュラムの変容について—高等学校高等科教員無試験検定指定をめぐるカリキュラム改編に着目して—（奈須恵子）

第八章 「社会」と対峙する仏教学—戦時下における大正大学を中心に—（三浦周）

第九章 戦前戦中期における宗教系大学の慰霊・追悼—大正大学を事例として—（寺山賢照）

第十章 戦時下の日本基督教団と神学校の統合（齋藤崇徳）

あとがき（江島尚俊・三浦周・松野智章）

引用文献一覧

概要…

本書は、「大学と宗教」という共通テーマを掲げた上で、主にアジア太平洋戦争期における「宗教の研究」および「宗教者の教育」について論じた論文集である。執筆者の専門・関心は多岐にわたっており、大学史、教育学、近代史、宗教史、思想史、宗教学、哲学、仏教学などか

それぞれのアプローチが行われている。

書名で記しているように、本書は「大学と宗教」研究会にとつて二巻目にあたる。平成二九年度は研究会第三期が開始するが、そこでは現代日本（特に戦後）における「大学と宗教」を対象として研究活動を行なっていく。研究成果は、シリーズ第三巻として刊行する計画であるため、ぜひ期待していただきたい。



## 室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。

澄円は槇尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観蒙から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。

具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究

会参加者各位がそれぞれの問題意識のもと個別に研究を進めている。

翻刻・書き下し文・語注作成作業の進捗状況については、昨年度までに首巻および第一巻（巻上乾上）の末までを終え、本年度は第二巻（巻上乾中）の途中までの作業を終えた。詳細については本誌掲載の中間報告をご覧いただきたい。

また、本年度は大橋雄人氏が平成二十八年度佛教文化学会学術大会において「後世における澄円の影響について」と題して研究発表を行った。

次年度の共同研究は、第二巻（巻上乾中）の作業を引き続き進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたいと考えている。これまでにやってきた翻刻等のデータを再整理し、出版に向けた作業を順次進めていきたい。

### 〈参加メンバー〉

代表者	大橋雄人		
参加者	吉水岳彦	郡嶋昭示	舍奈田智宏
	工藤量導	石川達也	杉山裕俊
	長尾隆寛	安孫子稔章	勝崎裕之
	後藤史孝	岩津英資	前島信也
	春本龍彬	星俊明	

## 唐中期仏教思想研究会

研究会代表 小林 順彦

当研究会では、中国唐代中期の帝都長安における、仏教諸師の動向を研究している。但し、その数は非常に膨大であり、何かに特化しないとその把握は極めて難しいといえる。初期の研究会で、長安を中心に活躍した天台僧飛錫の書物を取り上げたこともあり、今般の研究会もその延長線として、天台関係の諸師を中心にして調査を進めることになった。

中国唐代は中国仏教の歴史のなかで、とりわけ華開いた時代であり、各宗の教義もこの時代に発展確立したと言っても過言ではない。ただ、教学面からみればその通りなのであるが、実際にその礎を築いた人物の事蹟となると、未だ明らかになっていないことが多い。華開くということは、それだけ活発に人物が動いていたということでもあるが、未だ不明のものが多いのはなぜであろうか。

天台に限って言えば、所謂天台山系の流れと玉泉寺系の二流があったと言われて久しいが、特に玉泉寺系と長安の結びつきは強い。それは荊州と長安の距離の近いことに帰因すると思われる。そこでは宗団というよりは、個で動く天台僧が長安で活躍する諸師と接触し、天台の教学実践にその影響を取り入れ、独自に変化させていった形跡が見

られる。問題はその天台僧に影響を及ぼした人物が一体誰なのか、またいつどこでその人物と出会ったのかということである。

さまざまの人物が往来する帝都長安は、自宗の研鑽宣揚を目的とした場合、これ以上適した場所は考えられない。そうなると、なおさらその動向が気になるところである。これを解明するには、一般の仏教典籍からでは限界があり、その意味において広く歴史書や金石文などを俯瞰する必要があるであろう。

通常、先学の研究成果を孫引きし、また先学の調査した原典に当たって事が進められるのが普通であるが、しかし見落としが無いとも言えない。そこに見落としがあるかどうかを見つけるには、それらの文献の地道な再検討しかないのである。これには膨大な時間と根気が必要である。

この研究会では、時代を唐代中期に限定し、主に天台僧を中心とするも、その他の諸師にも注意し、気になる記述をカード化し、以って普段看過されがちな些細なものに焦点を当てて調査することになっている。今年度でほぼ『全唐文』の調査が完了したので、来年度は採取したカードを整理し、その内容について検討する予定である。そして諸師の動きを白地図に落とし込んで、長安での動きを表面化させたいと考えている。

研究会発足当初は、天台僧に重点を置く予定であったが、既述の如き悩みは意外と現在の諸宗でも抱えているようにで

ある。最終的には幅広く研究に寄与できるような資料集として仕上げたいと考えている。またその成果を基にして、研究会関係者としては、各自興味のあるものについて論文の製作にも取り組み、資料集の充実を図れば望外である。

## 中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は中世の東国における仏教の実態解明を目的に発足したものであり、現在は神奈川県立金沢文庫保管称名寺聖教の写本『仙芥集』（一三函——一〇三二）の翻刻を進めている。

『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（一二三三—一三〇二）の受法記録である。定仙は鎌倉の地に住しながら多くの人師より様々な法流を受法したため、その記録である『仙芥集』には当時鎌倉において活動していた真言宗諸師と彼らが相承する法流、そしてそれらの授受の実態等、貴重な情報が多く含まれている。本書がどのような経緯で成立したかについては不明であったが、後述するように本年度翻刻分の一三函——一一の奥書によって、定仙の弟子の智照が定仙の受法記録からテーマごとに集成したものであると考えられるようになった。

当研究会は昨年度までに一三函——一から九までの九冊の翻刻を終えており、本年度は一三函——一〇から一四までの五冊を翻刻した。そして、例年通りこれに解題を付して『綜合佛敎研究所年報』誌上に掲載することが出来た。

ちなみに、本年度の翻刻成果は冊数では昨年度と同じ五

冊であるが、丁数にして昨年度のおよそ三倍になっている。これは昨年度より試験的に導入した新たな作業方法に研究会参加者が慣れて来たことにより、より一層の効率化が図られた結果と考えられる。

以下、本年度翻刻完了分の概要を記す。

### ① 一三函——一〇

三宝院流の意教上人頼賢（一一九六—一二七四）の口伝を記したものである。頼賢は成賢の資であり、後にその法脈は意教流と称されるようになる。その内容は行法次第に関するものを中心に多岐にわたっている。識語が無いため伝授に係る状況は不明であるが、「有人云上人仰云」という記述がたびたびあり、定仙が頼賢より直接受法したものではなく頼賢の伝を伝える人師より受法したものと考えられる。

### ② 一三函——一一

本冊は道教方の親玄を始め、了一上人公然、意教上人頼賢の資である願行房憲静、憲深方の寛雅等、三宝院流諸師の口伝を記したものである。その内容は三宝院流の聖教・重宝等を収めたとされる「台皮籠（ダイノカワゴ）」の由来や収納品について、また唯授一人大事や宗大事等いわゆる法流の奥義にあたる印信類についての口伝である。

奥書には「先師仙公和尚所記録也」とあり、また「予抄書彼草中、為當流之親決、嘉元第三千十二月廿八日記之、

智照」とあることから、定仙の弟子である智照（生没不詳）が定仙の受法記録からテーマに沿って諸師の口伝を抄出し嘉元三年（一三〇五）に記したものであることがわかる。また、『仙芥集』というテキスト群自体が、智照によつて集成され名付けられたものである可能性も考えられる。

③ 一三函一——二

本冊も親玄を始め三宝院流諸師の口伝を記したものである。三宝院の名の由来や、諸尊法、後七日や大元法・八千枚護摩等の大法・秘法類の聖教の伝来や内容についての口決、また前冊同様「台皮籠」についても記されている。

④ 一三函一——三

本冊は勸修寺流の後七日御修法の日記について、了一上人公然の口伝を記したものである。表紙には「四卷内」とあるが、これは後七日御修法について記したものの四卷の内の一つであると思われる。

⑤ 一三函一——四

前冊同様、後七日御修法についての口伝である。表紙に「四卷内」とあることから、本冊が前冊と一具のものであることがわかる。本冊は醍醐の伝を記したもので、「了一上人云」と頻繁に記されていることから、これも了一上人公然の口伝を記したものである。

以上五冊をもって本年度を終えたが、来年度も継続して

翻刻作業を進め、本年度と同等の分量を成果として発表することを目指す。

## 仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 寛

仏教文化におけるメディア研究会では、文化現象としての仏教という枠組みから、古代インドから現代までの造形美術と、近現代の視覚媒体を通じて表現される仏教的イメージの様相について注目する。全体的な論考の基本方針としては、時代や地域ごとに文化現象としての仏教がいかに認識され、解釈され、変遷してきたのかを、メディアを通じて、視覚と言語、時間と空間、意味と形象等として表現されたものから読み解く。それにより、宗教者や信徒だけでなく、広く大衆が日常的に接してきた仏教の諸相について解明する。

古代インドにおいて説かれた釈迦の教えは、書物・絵画・塑像・建築・音楽などのメディアを通じて、宗教者と権力者だけでなく、文字を読めない大衆の間でも広く語られ、世界各地に教線を拡大していく。その過程では、時代や地域によって異なる社会と接触し、文化的融合を遂げながら、当初の形からは変化した仏教も生成される。つまり仏教は、インドの地方宗教から世界宗教へと移行する過程で表現され、伝達され、解釈され、受容される行為と共に、そのかたちを変え、多岐にわたる教義解釈を生んだのである。

本研究会では、このような歴史的前提に立ち、文化としての仏教を現前のものとしてきたメディア表現から読みとれる意味と形象の問題について考察する。意味をめぐる論考では、仏教的創作物から思想・価値観・習俗・世相・政治・経済・信仰・芸術などのイデオロギー（体系化された観念）を読み解き、さまざまな人々による解釈も含めながら、仏陀信仰を基盤とする仏教観の展開と変遷について探究していく。一方、形象をめぐる論考では、仏教的イメージをめぐる人間の営みに焦点をあてる。人間の身体感覚とメディア表現を通じて、観念と物質との双方を横断するイメージが、可視的に形象化される社会的な過程、人間の身体へ様々な作用をもたらすメディアとイメージの性質と機能、あるいは、イメージをめぐる制作者（発信側）と鑑賞者（受容側）との関係性について解明する。

また、メディアで表現された仏教が、諸現象をどのように結びつけ、秩序立てられた世界観を構築したのか。更には、そのような仏教的世界へ、身体的存在である人間をいかに位置付け、組み込んだのかを、人類によるイメージの生産・伝達・受容という視点から明らかにする。

仏教文化におけるメディア研究会は、本年度で活動四年目を迎え、来年度には、研究活動の集大成である出版物の編集刊行を控えている。平成二十八年度は、それに向けた論文執筆を進め、総合佛教研究所研究員を中心に週ごとで行う定例会と、分担研究者全員が集まる毎月一回の月例会

において、一体感のある論文とするために共有すべき資料の読み合わせや追加資料の確認、左記にあげる各論文に関する執筆進捗状況を報告しあった。

森 寛 「仏教絵本『佛教聖典 おしやかさま』にみ

るブッダの表象 ―仏教とキリスト教との混合―（平成二十八年度日本学術振興会 科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金 基盤研究（C） 課題番号一六K〇二三二九 平成二十八年度～平成三十三年度 「近現代日本の仏教絵本におけるブッダのイメージ研究」）

嶋田毅寛 「暗号論による仏教メディアの歴史」

猪股清郎 「空海のメディア性の原点としての「声字実

相」観―「自然じゅん」と「大我」のひろがり―」

藤近恵市 「古代インドにおける仏教文化の変遷」

清水浩子 「須弥山説の受容（仮）」

金 永晃 「仏教文化メディアの観点から見る慶州仏国

寺寺院建築」

大澤絢子 「新聞小説のなかの親鸞像 ―大正期における親鸞像の大衆化―」

高橋洋子 「高橋五山と仏教紙芝居 ―勢至丸様を中心

に―」

目下、これらの論文に、前年度まで三度にわたり発表し

てきた中間報告に基づく総論と結びを添えて原稿を形にし、勉強出版をはじめとする出版社との交渉を進めている。

## 密教聖典研究会

研究会代表 駒井 信勝

当研究会は本年度より、密教聖典研究会と『理趣広経』の翻訳研究会とが統合され、一つの研究会となった。そのため、『不空羂索神変真言経』と『理趣広経』の二本の経典を読み進めている。

前者の方は、『不空羂索神変真言経梵文写本影印版』を基礎資料とし、対応するチベット語訳および漢訳を適宜参照しながら精読している。ただし、チベット語訳は比較的梵本によく対応しているが、漢訳は大きく異なる場合も少なくない。また当写本には、文法および統語論上で解決すべき問題が多く存在し、その読解には困難が伴う。そこで当研究会では、類似の内容を説く関連文献にも視野を広げ、本経所説の教理や儀礼の理解に努めている。

なお、当研究会は平成八年度より発足しており、これまでの研究によって、梵文写本全百六十二葉分のうち、およそ百葉のローマ字転写テキスト化を完成している。これら一連の研究成果は、『Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāṇa (I) ~ (VII)』として『大正大学総合佛教研究所年報』において報告している。しかし、平成二十六年より、従来の方針を若干変更し、ローマ字転写テキストの提示だけでなく、サンسكريット語校訂テク

ストの Preliminary Edition、および試訳を加える形式で研究成果を報告している（詳細は密教聖典研究会『Amoghapaśākalparāṇa: Preliminary Edition および和訳註—サンسكريット語写本 ff.97v4-99r2—』『大正大学総合佛教研究所年報』37, pp.(41)-(68)を参照）。本年度も、この方針を継続して『Amoghapaśākalparāṇa: Preliminary Edition および和訳註(3)—サンسكريット語写本 ff.100r6-101r5—』を報告する。

後者の方は、『理趣広経』の校訂テキスト作成とその読解を行っている。残念ながら本経のサンسكريット語原典は未だ発見されていないことから、校訂テキスト作成の際には、本経のチベット語訳および漢訳を中心に扱わざるをえない状況にある。しかし、『初会金剛頂経』を始めとする関連文献との比較を通じて、可能な限り原語を部分的に回収しながら作業を進めている。また、これまでは数多く存在するチベット語訳版本の中で、デルゲ版、北京版、チョーネ版、ナルタン版、ラサ版、河口写本（東洋文庫所蔵）の六本を校合させていたが、平成二十六年からトクパレス版、シエルカル版、ブタク版を追加している。

本経のチベット語訳は、前編に相当する「般若分」(Śrīparamādyā-nāma-mahāyānakalparāṇa)、後編に相当する「真言分」(Śrīparamādyā-mantarakalpakhaṇḍa-nāma)に二分されてチベット大蔵経に収められており、それぞれ翻訳者が異なる。また本経の漢訳には、宋代の法



賢により翻訳された『最上根本大樂金剛不空三昧耶大教王經』があるが、明らかな誤訳と思われる部分が随所に確認されることから、その扱いには注意を要する。さらに本經には、Ānandagarbha による註釈『略釈』および『広釈』の二種類がチベット大藏經に収録されており、その中でも詳細な逐語釈である『広釈』(Śrīparamādyā-tīka)を参照している。『広釈』は原文を引用して註釈する形式であり、Ānandagarbha 著作当時の『理趣広経』原文が回収できることから、校訂テキスト作成の際に有用である。

昨年度より「真言分」に入り、その第1章である「金剛薩埵章」の読解を進めたが、一部の先行研究において指摘されているように、プタク版の読みが他版と著しく異なっており、取り扱いには注意を要することを確認している。プタク版の読みに関する問題は、今後の研究会においても取り上げていき、『理趣広経』全体を通じた視点でプタク版をどのように扱うべきかを検討していく所存である。なお、本年度の『綜合佛教研究所年報』には、本經第八章・第九章・第十章・第十一章のチベット語訳校訂テキストを報告する。

今後も両經の全容解明を目指して文献学的研究を継続し、その成果を『大正大学綜合佛教研究所年報』において報告していく所存である。

## 梵語仏典研究会

研究会代表 横山 裕明

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、本年度より従来の「声聞地研究会」・「律経研究会 (Vinaya)」・「修辭法研究会 (Kāya)」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。本研究会にとっては初年度であるが、各研究グループは前身から引き続きの内容として次のような研究活動を行った。

まず声聞地グループ(昭和五十四年度より共同研究を開始)は、第一瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。平成二十五年度より「第三瑜伽処」の解説を進めており、現在は出版に向けて最終的な準備段階に入っている。テキストおよび訳註の見直しと参考文献の整理をおこない、先に出版した「第一瑜伽処」「第二瑜伽処」と校合させることによって飛躍的に精度が向上している。来年度中には「第一瑜伽処」「第二瑜伽処」と同様の形式で「第三瑜伽処」を出版できる見通しである。なお、出版後は「第四瑜

伽処」を読解していく予定であるが、「第三瑜伽処」に関する国内外の専門家たちの評価やその他の出版情報に基づいて今後取り組みべき箇所を柔軟に選定していく。

次に律経グループ(平成十四年度より共同研究を開始)は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』『出家事』の解説を進めている。本年度は連携して研究会を開催してきた米澤嘉康(代表)「七世紀の律文献にみられる仏教者と仏教教団の研究」(科研費基盤研究C)の最終年度であり、国内外の専門家たちを招いてのワークショップを開催するために、これまでに発表した『律経』・『律経自註』『出家事』の論文(B.V. Bapat & V.V. Gokhale 校訂本 ss1~150 に相当)について校訂・和訳・英訳・思想的背景の再考を行った。また来年度からは、昨年度までに投稿した「律経の研究(10)」の続き(B.V. Bapat & V.V. Gokhale 校訂本 ss422~に相当)を解説していく予定である。

最後に修辭法グループ(平成十九年度より共同研究を開始)は、全五章からなるヴァーマナ(Vāmana)著『詩の修辭法の手引・註(Kāyālaṅkārasūtravṛtti)』の校訂テキストと訳註を平成二十四年度より順次、当研究年報に発表している。現在は第四章と第五章に取り組んでおり、第四章は一通り読了しているが、解決すべき問題点が複数残されていることから、現在、鋭意それらの解決に努めている。

る。また、第五章を正確に解読するにはパーニニ文法の知識も要するため、その準備段階としてパーニニ文法に関する文献類も併読している。サンスクリット修辞学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つことがこの一〇年間の共同研究から判明しているので、インド・アールヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。

## 仏教史料研究会

研究会代表 櫛田 良道

当研究会は歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い研究を進めることを目的として、今年度より新規立ち上げとなった。平成二八年九月に真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）史料調査を実施した。金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。そのため、今年度は文書・記録類を中心に史料整理を進めると同時に、目録の作成を目標とした。古文書・古記録は、印信箱や長持ちなどの木製の帙に納められたもので全五箱あるが、今年度はそれらの中でも最も重要と思われる三箱を中心に作業を進めた。先ず、それぞれの箱毎に中身の史料類へのナンバリングと写真撮影を行い、撮影枚数は三三〇〇枚にも及んだ。

現地での史料整理と撮影を終えた後は、研究会参加者による史料整理の分担作業へと移行し、目録製作のため史料解説とデータ入力作業を行い、現状としては主題・種類・

年代・奥書・備考などの簡単な項目立ての粗目録までは完成させた。研究会では、各担当からの作業の進捗状況の報告と、解説の難しい箇所などの読み合わせなどを行いながら、参加者全体の古文書解説の能力の向上を図っている。

今年度取り扱った文書の内容は、一箱…史料No.一五四まで、二箱…史料No.四三まで、三箱…史料No.一三まで（各箱共に枝番含む）で、金乗院史料の二／三程度（古典籍を除く）の撮影を完了させているが、今回整理分の中には、近隣寺院との本寺格を巡った争論の顛末記、本山交衆の記録帳簿である大衆帳、僧階補任状などが含まれている。特に大衆帳は、江戸後期のもので数年分あるが、同史料と本山に残されている「交衆帳」を照合させることで、当時の檀林寺院における僧侶の動向の一端を窺い知ることが期待できる。また、近隣寺院との争論を示す記録・文書類は、両寺の争論の発生から、幕府による裁許が下されるまでの一連の流れが詳細に記されており、非常に興味深い内容である。

次年度も引き続き、資料整理と目録作成のためのデータ入力作業を進めると同時に、今年度着手できなかった残りの史料群（全体の1/3程度）の整理・撮影作業を予定している。また記録類については、主題と奥書以外にも、内容的にどのような事柄が記載されているのか、という点についてももう少し踏み込んで検証しなければならない。そのため、研究会でも、それぞれの担当者が担当分を報告し、史料そのものについて考察する必要性があると考えている。